



水野和久さんのこと（水野和久教授退官記念特集）

宮ヶ谷，徳三

(Citation)

近代, 78:139-140

(Issue Date)

1995-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001387>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001387>



水野和久さんのこと

宮ヶ谷 徳 三

京大仏文科の三、四年生の時、私は澤瀉^{おもたか}久敬という大先生の哲学科の演習でデカルトの『方法叙説』を読むといので、おそろおそろその授業に出たことがある。さすが哲学演習というので訳読するのにも一語一語厳密に考えてしないと先生から厳しいチェックを受けることになる。たとえば *mon pays* を「わが国」と訳すと「わが…」は複数で *notre pays* の意となるから個人主義者デカルトでは「私の国」ではなければならぬ、といった具合である。仏文の学生としては非常に緊張させられた授業であったが、私はそこでテキストの厳密な読み方を教わったような気がする。

当時の哲学科の学生は一般に貧しく、おとなしい人たちが意見を求められても小さな声でボソボソ説明するという感じであったが、そのときちゃんとスーツを着こなし、シャレたカバンを机上に置き、デカルトについてとうとうと自分の意見を発表する一人の院生がいた。澤瀉先生は目を細めてそれを聞き、一つ一つうなづいていられたのを覚えている。この大先生と対等にものを言う、他の哲学科学生と違った人物、大した奴だなと思わせた人、それは私が出会った最初の水野和久さんの姿であった。

その水野さんと再会したのはそれから数年後、私が神大姫路分校にフランス語非常勤講師として行っていた63年の

夏、井沢義雄先生と御一緒のお付き合いの機会があった時だった。水野さんはやさしく非常に愉快な人で、楽しく須磨の海岸を散策したのを覚えている。留学の時、神戸港へ見送りに来て下さったし、以来人生の節々で個人的に親しく付き合っていたのだ。

神戸の人間には——私もその一人と自認しているのだが——地中海人と似て明るく鷹揚で、胸を拡げて人を迎え入れ、常に本音でものをいい、人と楽しくつき合おうとする人々がいる。水野さんはその典型と言っているのではないのか。それはまた旧制姫路高校以来という姫路分校時代の気風とも重なって見える。姫路分校では授業のあとよく酒の席につれて行かれたが、親密な雰囲気の中でケンケン・ガクガクの議論になることが多かった。小島輝正、井沢義雄といった大先輩たちもこうした神戸姫路の気風を共有した人々であった。

だから水野さんが大教大から神大へ移ってこられた時、ごく自然に来るべきひとが来たなという感じがしていた。来られてすぐ文化学大学院の創設にも中心的に関わられたというし、今回の国際文化学部設立にも常に議論の中心にいて、これらをうまくまとめ上げるといふ点で貢献されたと思う。

文化学の授業では仏文専攻の学生たちが熱心に聴講していた。デリダやドゥルーズ、レヴィナスといった現代フランスの難解な哲学は仏文専攻の学生にとって決してとっつき安いものではない。だが水野さんの解説を通すとそれは魅惑的現代思想として学生をひきつけることになったようである。

ともあれ、こんな水野さんが体力も気力も充実して、若々しい姿で定年を迎えられたということは祝福すべきことか、それとも定年という制度の不条理を問題にすべきか。すくなくとも大学にとっては残念なことに違いないと思われる。